

## 気魄の大観と

清冽・高雅・筆勢  
古径・鞆彦・青邨

ここに一枚の写真がある。米寿の祝賀会における満面笑みの横山大観と、その後ろに大観夫人と共に立つ小林古径、安田鞆彦、前田青邨の三画伯、兄事する大観への信頼感が汲み取れる写真、昭和30年のことである。院展を創った大観と、院展の三羽鳥と謳われた古径・鞆彦・青邨。大きく述べ日本画の近代化はこの4名を中心形づくられたと言えよう。メナード美術館では、平成21年に「横山大観展」を、平成16年には院展三羽鳥の展覧会を開催している。

大観は、恩師岡倉天心の理想を実現すべく、自然の持つ靈氣を日本画で表現しようとした。その画業の頂点は衆目、昭和15年の海・山十題と言われる。この20点の売上金で造られた軍用機4機を陸・海軍に献納した。彼獨力での快挙をなし遂げたのである。正に愛國者大観の本領發揮といふ所である。その海十題

の隨一と目される《海に因む十題・黒潮》が当館所蔵である。まるで山脈が連なるような押寄せる波濤の上に、燃える如くに真っ赤な太陽が輝いている。誠に豪壮であり雄渾である。大観はこの20点で日本人の気魄を示したかったと語っているが、最もそれが感ぜられる画面である。又大観と云えば富士山であるが、残念ながら山十題の富士は所蔵ではないが、山十題につながる《靈峰不二山》があり、姉妹的な《砂丘に聟ゆ》がある。

さて、大観を兄と仰いで院展を今日あらしめた三巨匠は、共に大正3年、大観と一緒に再興院展の創立に参加したほぼ同年輩である。

一番上の古径は、厳しい線描と清澄な色彩で

新古典主義と云われたが、その画境は、所蔵

の《栗端蝶》《八重山吹（瓶花）》に窺える。

次の鞆彦は、中世の史実や、中国の故事などの人物を厳密な考証のもとに描いた。中世で

は《後南朝自天王像》、中国では《王昭君》が

それである。特に《わかき射手》は、鎌倉期

の北条時宗と思われる武士の、眉宇の表情と

云い、衣服の鉄線描と云い、高いその品格が

魅力である。最後に青邨は、古典研究のたゆまぬ研鑽を元に、歴史画に力量を発揮した。

甲冑の裏まで描けると云われたその筆力は、

《出陣》に窺える。歴史画では、神武天皇の東征を描いた《金鳴》があり、又現代の琳派とも言える《紅白梅》は、たらし込みなどの技法を現代的な感覺で用い、華麗そのものである。

古径からは奥村土牛が、鞆彦からは小倉遊亀、片岡球子が、そして青邨からは平山郁夫が出て、夫々に現代につながっているのである。

(メナード美術館顧問)



横山大観 《海に因む十題・黒潮》 1940

メナード美術館開館25周年記念

コレクション名作展II 古美術と版画

4/14まで開催

コレクション名作展III 近代日本画と工芸

4/20~6/30